観禳田記

毎歳正月初五於吾大士宝殿行禳田之事玆日隣郷之民来集観之者如堵牆而與其事者司祀一人田俊一人田夫三人撃鼓一人擕罇者一人饁者一人為負児婦者一人為〓者一人駆牛者一人都十有一人矣為其具也斲木為耟結藁作笠木葉象苗素衣〓蓑以集於殿上既而先撃警而后居鼓於中央役夫杖耟肩蓑列三面粛然歌

歌曰

善哉作田也作前田也善哉自前田入遠田也善哉所徂宜哉桑麻之種之滋也善哉繭與麻也麻繭可衣哉善哉可衣田衣哉善哉陳銀壺焉善哉水之〓水持倶焉善哉富所〓焉既而右旋耕而復撃鼓相共歌

歌曰

下于春田稲苗之葉之看摘入于手詣社乎壟上之遠畦中之看乎稲苗連綿乎所滋蔓乎

次田畯出焉二毛折腰盛衣佩刀左持摺扇右棒𩝐𩝐大尺有餘円如鏡而貫其中央為柄如簦曽聞此𩝐冬月製之秘蔵諸匱中若破裂缺損則為魃故慎蓄之云既而右旋北面而放声曰

稲人乎稲人乎稲人乎今年之豊熟観音之第一之〓可為佳稑之〓矣福塚之犂牛耕馬執鞭取轡各為苗種之設五万人来従爾事米塚之耕牛犂馬逐后駆前自為苗種儲五万人来集遄哉 禳田を観るの記

毎歳正月初五吾が大士宝殿に於いて禳田の事を行う、この日隣郷の民来り集りて観る者堵牆の如し、而してその事に與る者は司祠一人一人田夫三人撃鼓一人携罇者一人饁者一人為負児婦者一人〓者一人駆牛者一人すべての十有一人なり。その具たるや木を断りて耟（すき）となし藁を結びて笠となし木葉もて苗にかたどり素衣を蓑とよび以て殿上に集まる、既にしてまず警鼓を撃ちてのち鼓、中央に居り役夫蓑を肩にし耟に杖つきて三面に列りて粛然として歌う

歌に曰く

よふしんや、田をつうくる、かどたんをつうくる、よふしんやかどたんよりいりまんする、とふもに、よふしんや、をくところ、よふしんや、くわさふのこたんねをひろめ、ようふしんや、まいもまい、ままいも、きぬうんなよふしんや、田ごろもにきぬうんな、ようふしんや、しろがねのつぼをならべ、ようふしんや、水くふめば、水もつとうもだ、ようふしんや、とみぞくまあるんな。

既にして右に旋り三たび耕してまた鼓をうちて相共に歌う

歌に曰く

春田におりるなら、とうみやうさのはを、みやくてにつみれての、みやえまいる、よのるすもとよりも、うちをみやればの、とうみやうかづらの、なねざすところおの。みなかしこ。

次に田畯出ず。二毛にして折腰盛衣にして佩刀、左に摺扇を持ち右に𩝐を捧ぐ。𩝐は大いさ尺有餘夷木葉こと鏡の如し。而してその中央を貫き柄をつくりて、笠の如くす（簦は柄のある傘、笠は柄のないカサ）。曽て聞くこの𩝐は冬月これを製し匱中に秘蔵す。若し破裂欠損すれば則ち魃となる。故に慎んでこれを蓄うと云う。既にして右に旋りて北面して声を放ちて曰く

よなんどふよ、よなんどふよ、よなんどふよ、こんねんのあまんどし、くわんおんのいちのつぼの、よきわせのなはしろせうず、ふくづかのまんがうし、まんがふま、しんどりはなどり、ないぐさの、いよふゐして、ごまんにん、きっとまゐれ、よなづかのまんごうしまんごうま、しんどりはなどり、ないぐさの、いよふゐして、ごまんにん、きっとまゐれ。次一人被白衣為摧牛之像出躊躇又二人載苧蒲擕耕具来争牛之前後〓而后三耕畢而牽牛辟焉

次一人提小桶徐二来而立正面維里長之次而兼神事者也所謂司祠者是行年所七旬矣而向於鼓前齊如祝言而為播種状祝曰

観音第一田之美早稲之種丼丼　三播種於鼓上

満山弘法大師之経嚢之種丼丼　仝上

来会人及詣集客其貴賤上下白鬚之種丼丼

既而棒扇又祝曰

謹上散供再拝再拝敬白是正当歳之年号某年某干支日居月諸正月朔日五日択定為吉日者也春之下種者従心所欲秋之穫納毎畞町千束毎町万束畦上万二于苗場可憎者〓食黄雀貪食慈烏穿畦石鼠鑿根土龍蹂躙水鼈於退之以為豊年也於山物者奔峡麋鹿走澤豵豝趫峯鋭耳明視於退之以為登歳也殖而向可懼者洪水與大風蝗蟲與蟷螂芃二幽莠和融萌生長哉長哉聞于里長之所為雑劇也為祝賀乎哲人與賢者仰而思俯而惟告之於何所而可穰乎於京都稲荷與祇園住吉與八幡法性寺與法勝寺自是西筑紫之博多歟泥海歟従之東暘谷也嵎夷之土也泥海也放之次に一人白衣を被りて摧牛の像をなし、出でて躊躇す。又二人苧蒲（すげ笠）を戴きて耕具を携え来り、牛の前後を争う。定まってのち三たび耕す。畢って牛をひいてしりぞく。

次に一人小桶を提げて徐々に来って正面に立つ。これ里長の次にして神事を兼ねる者なり。いわゆる司祠者なり。これ年に行く所七旬なり。而して鼓前に向かって齊如祝言して、播種の状をなす。祝して曰く

くわんおんのいちのつぼの、よきわせのたねどんぶとんぶ　三たび種を鼓上に播く

まんざんみだいしの、きやうぶくろのたねどんぶとんぶ　　同上

まいりとう、まいりたまふ、とうとくだんの、きせんじやうの、しらひげのたねどんぶとんぶ　同上

既にして扇を捧げて、又祝して曰く

きんじやうさんぐ、さいはいさいはいと、うやまつてまうす。これあたりきたるとしの、ねんがふは、某年某干支日居月諸、しやうぐあつついたち、いつかきちにちと、さだめさふらえば、はるのたねおろしは、こころのままよ、あきのかりいね、せまちにせんぞく、まちにまんぞく、あしうらの、まんまんなわしろの、ところによすまぢきものに、ひろひくらうこすずめ、すゝりくらうこがらす、あぜをもつはけらむし、そこをもつはひつむし、のりありくはかわがめ、これにたいにおいては、よふもよしとさだめ、やまのものにとりては、そわをはしるさをしか、さはをはしるいのこめ、みゝやりはしるみみやうだかのこうさぎ、これをたいにおいては、よわもよしとさだめ、うえてののちに、よすまじきものにて、おふみずとおほかぜと、こんのこと、いもちり、ひかりわたる。ひえくさとろりといこづる。およれ、およれ、きかふに、としよりのところに、ざふげこどをするやら、しゅげごとをするやら、のもさとゝ、さかしをは、あわんぶきに、しわんぶき、これをば、いづくえまふしおいやしするべし。きやうとにとりては、いなりと、ぎをんと、すみよしと、やはたと、ほつしやうじと、ほつしやうじ、これよりにしにとりてわ、つくしかはかたえ、どろのみに、これよりひがしにとりてわ、あくるつかたえ、えぶすがじようどえ、どろのみにはふ。次復田俊出放声曰

稲人乎稲人乎稲人者噫酩酊于酒矣無双苗也良苗哉上葉抽矣観音之第一田之佳稑可蓻也福塚之耕牛犂馬推鞦把靶田夫田女苞食鍬鋤及蓑笠之設而五万人速可来焉米塚之犂牛耕馬叱尾〓頭田夫早来哉

次三人持扇為採苗之状而歌曰

採苗早〓女子手〓手手之行〓相引之行〓我捉苗〓三穂出〓田面茁茁〓

次三投苗於鼓上

又三人載笠持扇與苗而為種蓻之状而歌

歌曰

早朝植富田手手而往也所引手往也自京来黎節之稑稲三把米八斛也実福禄哉黧節稲之蓻芟刈歛穧栄于七世哉

次又三人来厥一人為婦女之装襁負木偶児又一人荷酒罇一人載飯器羞之維饁彼田畞謂與

又田俊出曰

酒泉洗白牛而駆上于飯山哉次にまた、田俊出でて、声を放ちて曰く

よなんどうよ、よなんどうよ、よなんどうこそ、いひさけに、めいていしたり。あつぱれなへや、よいなえや、うえばたつたりや、くわんをんの、いちのつぼの、よきわせうえず。ふくづかの、まんごうし、まんごうま、しんどり、はなどり、たちおとこ、そうとめ、つつみしら、くわにみのかさの、よういして、ごまんにん、きっと、まいれ。よなづかの、まんごうし、まんごうま、しんどり、はなどり、たちおとこ、そうとめ、つゝみしら、くわにみのかさの、よういして、ごまんにん、きっと、まいれ。

次に三人、扇を持ちて、採苗の状をなして、歌に曰く。

あさなえをとる、おなごのてわの、ていにてぞゆく、ひかれてぞゆくな、わがとるなえに、みつばさいたるな、よつばにこそ、たうもわさかゆくな。

次に、三たび、苗を鼓上に投ぐ。

又三人、笠を戴き、扇と苗を持ち、種蓻の状をなして、歌う。

歌に曰く

あさはかに、とみるたを、うえるてにてぞゆく。ひかれてそゆくな。きようからくだる、ふしぐろの、ゐねさんばで、よねははちこくな。げにめでたや。ふしぐろの、いねは、かりかりいれて、ななよ、さかゆくな。

次に三人来る。一人は婦女の装をなして、木偶児を襁負す。又一人は酒罇を荷なう。一人は飯器を戴きて、これを羞す。これ彼の田畞に饁するの謂か。

又田俊出でて曰く

さかのいづみで、しろうしあらひ、いいのやまえおひあげよ。次白牛出焉一老人来而扇牛乃従牛之後三旋〓〓曰

鶴與亀之祝賀也哉三奏闋焉

既而役夫相聚食飯飲酒而罄焉而田畯先起而懐𩝐杖其柄下階翼如司祠徹諸奠物而怡二去焉餘夫提器杖収具而退焉穰事畢矣会衆悉解散焉先住持已下僧徒入道場修法読経畢而后役夫始穰事而僧徒未曽與其事徒出観之耳雖然以封内之事故終始皆告諸我焉抑行之也不識始於何時也若其祝詞歌謡悉以方語国字為文甚鄙俚猥雑不可読余為住持観之数年焉其事雖鄙猥乎以有聊似古雅因感而戯作之記而其祝詞歌謡更以正声為文余素固陋其文翻恐不免鄙俚又加蛇足之類而已于〓宝暦二壬申春正月丁卯現住昶如識次に白牛出づ。一老人来りて、牛をあおぐ。すなわち、牛のあとより、三たび旋りて、裸足で血を敲いて曰く

鶴と亀のお祝いなり。三たび奏しておわる。

既にして、役夫相聚りて、飯を食い酒を飲みて、これをつくす。而して田畯まず起きて、𩝐をいだいて、その柄に杖つき、階を下りて、翼如たり。司祠諸奠物を徹して、怡々（いい）としてさる。餘夫は器を提げ、具を収めて退く。穰事畢る。会衆悉く、解散す。まず住持以下僧徒、道場に入りて、修法読経畢ってのち、役夫穰事を始めて、僧徒いまだ曽てその事によらず。ただ出でて、これを観るのみ。然りと雖も封内の事を以ての故に、終始皆これを我に告ぐ。そもそも、これを行うなり。いつより始まりしを識らざるなり。もしその祝詞歌謡、悉く方語国字を以て、文をなし、甚だ、鄙俚猥雑にして、読むべからず。われ、住持となりて、これを観ること数年、その事鄙猥乎と雖も、いささか、古雅に似たる有るを以て、因って感じて、戯れに之が記を作る。而して、その祝詞歌謡は、更に正声を以て、文をつくるべきも、われ素より固陋にして、その文翻、恐らくは鄙俚を免れざらん。又蛇足を加うるの類のみ。時に宝暦二壬申春正月丁卯、現住昶如識るす。